

II. 「宇宙文化学」連携講義成果—学生レポート実例集—

女性宇宙飛行士について

神戸大学3年 日野美里

はじめに

私は、現在所属ゼミにおいて「アメリカ演劇に見る女性像の変遷」に関する研究を進めていることもあり、それぞれの時代、社会における女性のあり方に関心を持っている。また、グループ発表を通して、宇宙飛行士候補生が受ける訓練について調べていた際に、このような過酷な訓練を耐えぬき、宇宙飛行士の座を獲得した女性について更に興味を持ったため、今回は宇宙飛行士として活躍された2人の女性に焦点を当てて、彼女たちが女性としてどのような困難を乗り越え、またどのような想いを持って宇宙飛行士として過ごしてきたのかということについて見ていきたいと思う。

1. アメリカ人女性宇宙飛行士の活躍の歴史

1960年頃、アメリカ社会における女性とは、政治的・経済的・文化的に男性には当然のものとして与えられた諸権利を賦与されず、沈黙を強いられてきた「弱者」であった。1970年頃には女性運動も活発化し、アメリカ演劇における女性も人間としての膨らみと多様さを示すようになった。1980年代になるとアメリカの女性演劇は怒りから肯定へ、女性を単なる犠牲者として示すことから、自己の生をコントロールできるものとして描かれるように変わった。またこの時期には数々の演劇賞を女性が受けた時期であり、ここからも分かるように、アメリカ社会において女性のステレオタイプが壊され、男性と同様の人権が徐々に確立されてきた時期であった。だが、宇宙飛行士の世界ではまだまだ女性が珍しい時期であった。そのことを表すのに米国で初めて宇宙飛行をした女性、サリー・ライドが挙げられる。1983年6月、彼女の搭乗決定が発表されると、マスコミはこぞってライドをタレントのように取り上げた。「ライド・ソング」やタップダンスが作られ、ライドのイラスト入りTシャツが出回るほど人気を呼んだが、一方記者会見では、「宇宙で困った事があると泣きますか。」「宇宙でブラジャーをしますか」などの冷やかしの声が多数出た。それに対し、ライドは「なぜ男性宇宙飛行士にはそういうことを聞かないのですか」と切り返し、「私は女性史の一ページを開くためにNASAに来たわけではありません。女だから選ばれたと思っては困ります」ときっぱり言い切ったそうだ。このエピソードから、この当時米国においても女性宇宙飛行士はまだ珍しく、マスコミも特別な目で見ていたことが良く分かる。ライドの飛行の一年後に、米国女性で初めてスペースシャトルの外に出て宇宙遊泳をすることに成功した人物にキャサリン・サリバンが挙げられるが、この当時、彼女の飛行前に、宇宙服のサイズをめぐって「女

性差別論争」が起きた事がある。宇宙遊泳などの船外活動には、超低压と真空に耐える特別な宇宙服がいるが、これは袖の長さが3ミリ、足の長さが6ミリ違っても、宇宙空間での難しい仕事はこなすことが出来ない。当時のNASAの宇宙服は男性用のものばかりであり、サイズが合わない女性宇宙飛行士は船外活動ができなかった。幸いサリバンは身長168cm、68キロのがっしりした体格だったため男性用でも問題はなく、船外活動によって通信衛星に燃料を補給するという任務を無事こなしたが、当時の女性宇宙飛行士8人のうち5人が165cm以下で宇宙服のサイズが大きすぎたために、「これでは宇宙遊泳に挑戦できない」と不満がでたという。予算難にあえいでいたNASAは「女性差別ではない。高価な宇宙服を買う予算がないためだ」との弁明に懸命だったそうだ。だが最近では、宇宙服は進化し、胴体・腕・手袋などのパーツごとに自分のサイズのものを選んで取り付ける準オーダーメイド形式に進歩した。このように、徐々にではあるが時代の流れに伴って女性の宇宙飛行士としての道が切り拓かれるようになってきた。また女性の宇宙飛行に関しては、旧ソ連の方がアメリカよりはるかに早く、旧ソ連では、1963年6月、ワレンチナ・V・テレシコワが宇宙船「ウォストーク6号」で飛行した。だが、十分な訓練を積んでいなかったために、約71時間の飛行中に肉体的、精神的に苦しんだと伝えられ、ソ連の宇宙計画責任者は「二度と女性を宇宙へ送らない」と怒ったとも報道されている。二人目の女性はS・サビツカヤで、テレシコワの飛行から二十年も経っていた。米国の「ジェミニ」・「アポロ」にしても、それまでの宇宙船は打ち上げ時に地上の5倍もの重力がかかり、地球に戻る大気圏突入時には7倍の力がかかったため、このため戦闘機のパイロットとして厳しい訓練を積んだ、鉄人のような体力を持つ宇宙飛行士にふさわしいとされてきたのである。ところがスペースシャトル時代になって、打ち上げ時に体にかかる重力加速度を三倍にまで減らす事が出来、女性や高齢者でも宇宙飛行が可能になった。女性の宇宙進出を軌道に乗せたと言う面でも、米国のスペースシャトルの果たした役割は大きかった。NASAの女性宇宙飛行士第一期生の一人である51歳のシャノン・ルシドは三人の子供がいてすでに4回の飛行を経験しており、彼女は8歳のころから「宇宙探検をしたい」との夢を持っていたが、当時は男性飛行士しか採用せず、夢を実現するチャンスはなかった。苦勞して教員になり、三人目の子供をもうけた後にチャンスが到来した。その時彼女は、「最初の頃は随分珍しがられて特別扱いも受けましたが、今では女性宇宙飛行士はごく普通の仕事と見られるようになりました。」という言葉を残している。ここまですべて分かるように、1970年頃ではまだ宇宙における女性は少数派であり、しばしば差別的発言も見られたが、技術の進化に伴い、また夢を実現させようという強い思いを持った女性達の存在によって、現在多くの女性宇宙飛行士が誕生するに至ったのだと言える。

2. 日本人女性宇宙飛行士について

現在アメリカでは女性宇宙飛行士が比較的に多く、軍出身の人もいればエンジニア、医師、研究者など様々で、総勢40名ほどの女性宇宙飛行士がおり、そのうち十数名は出産も経験している。搭乗メンバーを決める際も子供がいることはハンディになることはなく、妊娠中の

訓練内容は基準に従いながら、医師と相談して決める。アメリカでは女性は出産後、すぐに仕事に復帰する人が多いのでNASAには託児所もあるほど、サポート体制が整っていると言える。一方日本ではまだ向井千秋、山崎直子のみであり、ロシアでも女性宇宙飛行経験者は3人である。山崎氏が宇宙飛行候補者の選抜試験を受けたときの応募者数を見ても、864人のうち女性の応募は1割程度だったという。このように、日本において女性宇宙飛行士とはまだまだ少数派であると言えるが、山崎氏は訓練の大変さは女性も男性も変わらないと話す。彼女が女性である事を唯一不利に感じたのは、ロシアの雪原でのサバイバル訓練の際に、防寒着として上下繋がった「つなぎ」を着ていたために、全部脱いで下着1枚にならないと、用を足せなかったことだと話す。その時はジッパーを開けるだけで用を足せる男性が羨ましかったが、それ以外の時は男性の方が有利だと思った事はないとのことだ。女性は男性に比べると、体力的なハンディは確かにあり、体力を使う船外訓練や、重いバックパックを背負って山道を歩く訓練では体力的負担も大きかったが、無重力空間である宇宙で働くには、ある一定の基礎体力と持久力があれば、体力の差はハンディにはならない。実際に宇宙に行ってみて、ミッションをこなし、女性も普通に働けると思ったというのが彼女の感想である。たとえば「生理のときはどうするのか」という質問に対しても彼女は、「搭乗が短期間の場合、その期間が重ならないようにピルでコントロールが可能です。また何ヶ月も滞在する女性に聞いてみると、ピルを飲み続け、生理が来ないようにした人もいれば、タンポンを使った人もいました。無重力でも普通に大丈夫です。³」と答えた。また、宇宙ステーションでは、尿をリサイクルして飲み水に変えるが、生理の時はリサイクル水に血が混じってしまわないように、布製のフィルターを1枚かませれば、血液除去できリサイクルできるように改良されているそうだ。このように現在では女性でも十分に宇宙で滞在できるような状況ではあるが、他にも仕事以外のこと、家庭、出産の時期、そして育児に関しては、女性は男性よりも考えなくてはいけないことがたくさんある。山崎氏も、日本から派遣されている身としては赴任中に産休や育児休暇がとれるのか前例がなく、「子供を生んだらミッションが遠ざかる」という気持ちがあったそうだ。体を酷使するサバイバル訓練や船外活動が控えている時に妊娠すると、訓練のスケジュールが変わり、多くの人に迷惑がかかるため、訓練スケジュールと宇宙飛行、両方を見極めて妊娠の計画を立てなければいけなかった。子供の教育などについては海外勤務する人たちの共通の悩みであろうが、ただ一般的な海外赴任であれば大体3年程度の期限が決まっていて終われば帰国という予定が見える。それに比べると、宇宙飛行士はアメリカでの生活が何年になるか全く分からないため、日本とアメリカのどちらに軸足を置くのか、中々決められなかったと彼女は話す。家族という存在がありながら長いマラソンを走り続ける道のりは、人生で何が大事か、優先順位をつけることの連続であろう。そんな女性がより働きやすいような世の中、アメリカのようにベビーシッターや保育所が充実していて、日本の子育て環境の幅もより広がれば、女性もそれぞれのワークライフバランスを図り

³ 「宇宙飛行士になる勉強法」 p195 より

やすいのではないかと考える。また、日本人初のスペースシャトル搭乗者である向井氏に関しても、「NASAでは(女性が宇宙飛行するのは)日常茶飯事で、私もとりたてて女性である事を意識したことはありません。でも日本では女性の殻を破れないで行動範囲が狭くなっている人もいます。私の姿を見て、あきらめずに立ち向かえば何でも実現できるのだと、女性が自信を取り戻してくれると嬉しいですね⁴。」と、同性への積極的なメッセージを送っている。

3. 考察

ここまで見てきたように、宇宙飛行士とはかつてたくましい男性の職業とされており、当初女性宇宙飛行士の採用は認められていなかった。時代が進み女性の採用が認められるようになってからも、宇宙服の問題やマスコミによる差別的報道など、様々な問題が残ったままであった。だが、徐々に状況は変化し、現在 NASA では多くの女性宇宙飛行士が活躍しており、「ママさん宇宙飛行士」も決して珍しい存在ではなくなった。アメリカに比べるとまだまだ宇宙における女性が少数派である日本であるが、山崎直子、向井千秋という日本の女性宇宙飛行士を代表する二人の女性から示されるのは、宇宙飛行士は決して女性にとって手の届かない職業ではないということだ。彼女たちの言葉からは「女性だから」といったマイナスな表現は一度も聞かれなかった。逆境に負けず夢にむかって走り続ける事、諦めずに信じ続ける事で一見不可能なことも、可能にすることができるということを彼女達は体現している。日本では宇宙飛行士に限らず、女性の育児後の労働率が他国に比べ低い、男女共同参画社会実現を目指し、出産後も社会復帰しやすい環境が整えられつつあり、状況は少しずつ改善されていると言える。妊娠・出産といった女性としての一大イベントのタイミングや家庭と仕事の両立の面で、女性宇宙飛行士の抱える問題はまだまだ完全にはなくなったとは言えないが、時代の流れに伴い、女性にとって宇宙がより身近な存在となっていることは確かである。私自身、同じ女性として、これからの人生でどのような逆境が立ち会っても、負けることなく夢に向かって走り続け、調和のとれたワークライフバランスを実現したいと思う。

参考文献

- 岡野敏之 (1994) 『向井千秋 メダカと飛んだ 15 日』 読売新聞社
- 向井万起男 (1995) 『君についていこう 女房は宇宙飛行士を目指した』 講談社
- 山崎直子 (2010) 『何とかなるさ！ママは宇宙へ行ってきます』 サンマーク出版
- 山崎直子 (2012) 『何とかなるさ！ママは宇宙へ行ってきます』 中央公論新社

⁴ 「向井千秋 メダカと飛んだ 15 日」 p184 より